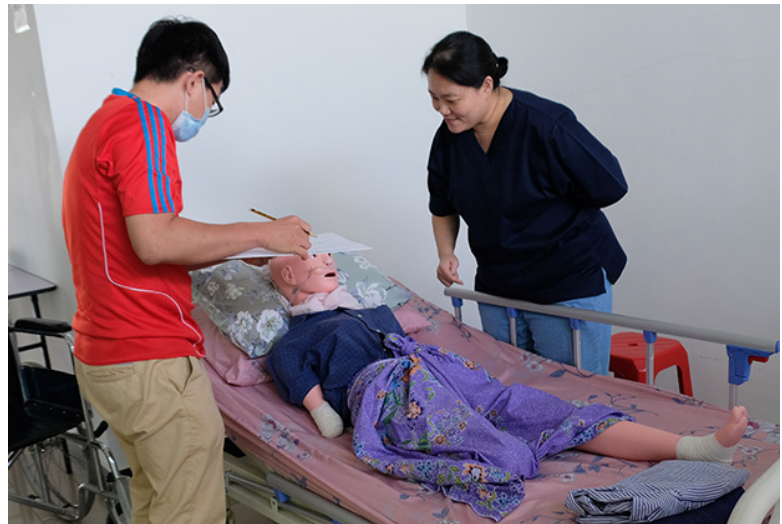


マレーシア

## 介護人材育成に日本の経験を 北海道の事業者、高齢化社会に向け

独自 PICK UP サービス 2023年5月18日

人口ボーナスによる経済成長を享受するマレーシアでも、2030年以降は高齢化社会の到来が予想されている。特に、方部では喫緊の課題だ。マレーシアでは現在公的な介護保険制度はない上、介護サービスに対する認知度も十分とはいえずは外国人メイドが自宅で高齢者の世話をしているケースが一般的。そうした中、北海道で長年介護事業に携わった日系専門の育成に立ち上がった。【降旗愛子】



介護の資格取得を目指し実習にはげむスイフト・ケアの学生。看護師の資格を持つインストラクターらが指導に当たる＝5月、ペラ州（NNA撮影）

マレーシアでは、30年に65歳以上の高齢者が人口の1割を突破し、高齢化社会が到来すると見込まれている。

首都クアラルンプールや、ハイテク産業が集積する北部ペナン州からそれぞれ車で2時間程度の距離に位置するペラ州で最も高齢化が進む地域だ。かつてはスズ鉱山や天然ゴムのプランテーション産業などが栄え、中国から多くの労働者それらの産業が衰退すると、若い人々は職を求め工業化の進む首都圏やペナン州へと出ていったという。

ペラ州イポーの介護人材養成学校、スイフト・ケアで顧問を務める井澤圭一さんは、北海道岩見沢市で長年にわたり認知症患者向けのグループホーム、訪問介護サービス、介護付き有料老人ホームなどを複数経営してきた。10年ごろからの介護事業参入を模索し、18年には北海道の施設を譲渡。19年にはマレーシアの長期滞在査証（ビザ）「マレーシアド・ホーム（MM2H）」を取得した。

スイフト・ケアは、マレーシア政府の技術認定プログラム（SKM）に準拠した介護人材養成学校としては国内2カ所ナウシルス下の21年10月にオンラインクラスを開講した。対面での実習も可能になった現在の学生数は25人になった

アの運営責任者でイポー出身の郭福量（コック・フーンレオン）さんによると、同市内でもう1カ所、さらに数カ月以内ランゴール州プタリンジャヤでも開校予定で、学生数は最大75人規模になる予定だ。

スィフト・ケアでは現在、看護師や医師など医療系のバックグラウンドを持つインストラクター4人が学生の指導に当療や公衆衛生、身体的な介護の技術はマレーシアでも広まりつつあるが、今後は認知症の専門ケアや、介護施設の運営スキルについても必要性が高まる見通しだ。マレーシアでの資格取得に必要なカリキュラムに加えて、認知症のケアや訪わってきた井澤さんの経験や日本の介護技術も取り入れ、そうした需要の受け皿も目指す。

#### ■政府、介護資格の段階的義務付けも

井澤さんは、マレーシアの高齢者介護の現状について、「日本でいえば、30年前の状況に近い」と話す。30年前のE介護施設でのケアが広まり、介護保険の必要性が議論され始めた時期だ。



スィフト・ケアはイポー市内最大の介護施設「マイプレイス」と提携している = 5月、ペラ州（NNA撮影）

若年人口が増え続けるマレーシアではまだ高齢化の実感が薄く、介護は家族や外国人メイドによるケアの延長という認識を施設に預けるのは恥とする価値観もある。

介護施設の運営や就労のための資格も問われず「中には外国人の若いメイドが認知症のお年寄りを世話し、夜になるとてしまうような施設もある」（井澤さん）。近年は不動産デベロッパーなどによる高齢者住宅への参入が活発になって康で第二の人生を謳歌（おうか）するアクティブシニア向けの華やかな施設は盛んに取り上げられる一方、認知症や自しい人の介護、みとりといったサービスには光が当たらないのが実情。介護を受ける人や家族の生活の質、サービスをの養成まで理解は広がっていない。

スィフト・ケアでは、介護への理解を広めるべく各地でのセミナーも開催。地元の議員と連携し、ペラ州だけでなくラ州などでも実施した。過疎化が進む地方部は高齢化への関心が高く、受講者も熱心だという。

マレーシア政府は介護サービスの水準引き上げに向け、施設の経営者や働く人に専門資格の取得を義務付けていく方針に対する認知が低い中、人材の育成や確保は容易ではない。

イポー市内で介護施設「マイプレイス」を経営する周静芳さんは、資格が義務付けられていない現在でも従業員の確保と話す。周さんは1980年代から高齢者施設を運営し、マイプレイスはイポー最大かつ最も歴史のある介護施設となっは主に50～100歳代と幅広く、100人ほどの利用者を約40人の介護スタッフがケアし、3食の食事や洗濯といったサる。長期入所だけでなくショートステイも受け入れる。昼の時間帯は地元人材が担当が、夜勤は外国人のスタッフが中

スィフト・ケアは、技術認定プログラムで必須となる現場実習先として、マイブレイスと提携している。将来的には卒業させる計画で、周さんは「人材確保が困難な中、専門学校の開校に期待している」と話した。

#### ■学生のバックグラウンドはさまざま

スィフト・ケアで学ぶ最年少の学生は、アベリー・ウォンさん（16）。クアラルンプール出身で、地元で中等学校で勉学よりも手に職をつけたいとの希望があり、新聞広告で介護人材養成学校の開校を知った両親が問い合わせきたとを離れ、周さんが経営する施設に「ホームステイ」しながら介護の勉強をしている。アベリーさんは「多くの人を助い。卒業後は介護施設で働くつもりだ」と話した。

介護の資格取得を目指すテー・キムリーさん（41）は、もともと地元の不動産業界で働いていた。業務で介護施設にめるうちに、将来性を感じて養成コースの受講を決めたという。「自分が介護を受ける将来に備えて、マレーシアの介く変えていきたい」と意気軒高だ。テーさんは介護技術だけでなく、施設マネジメントや訪問介護についても学んだ。



マレーシアの介護業界の底上げを目指す井澤さん（左）、周さん（中央）、郭さん（右）＝5月、ペラ州（NNA撮影）